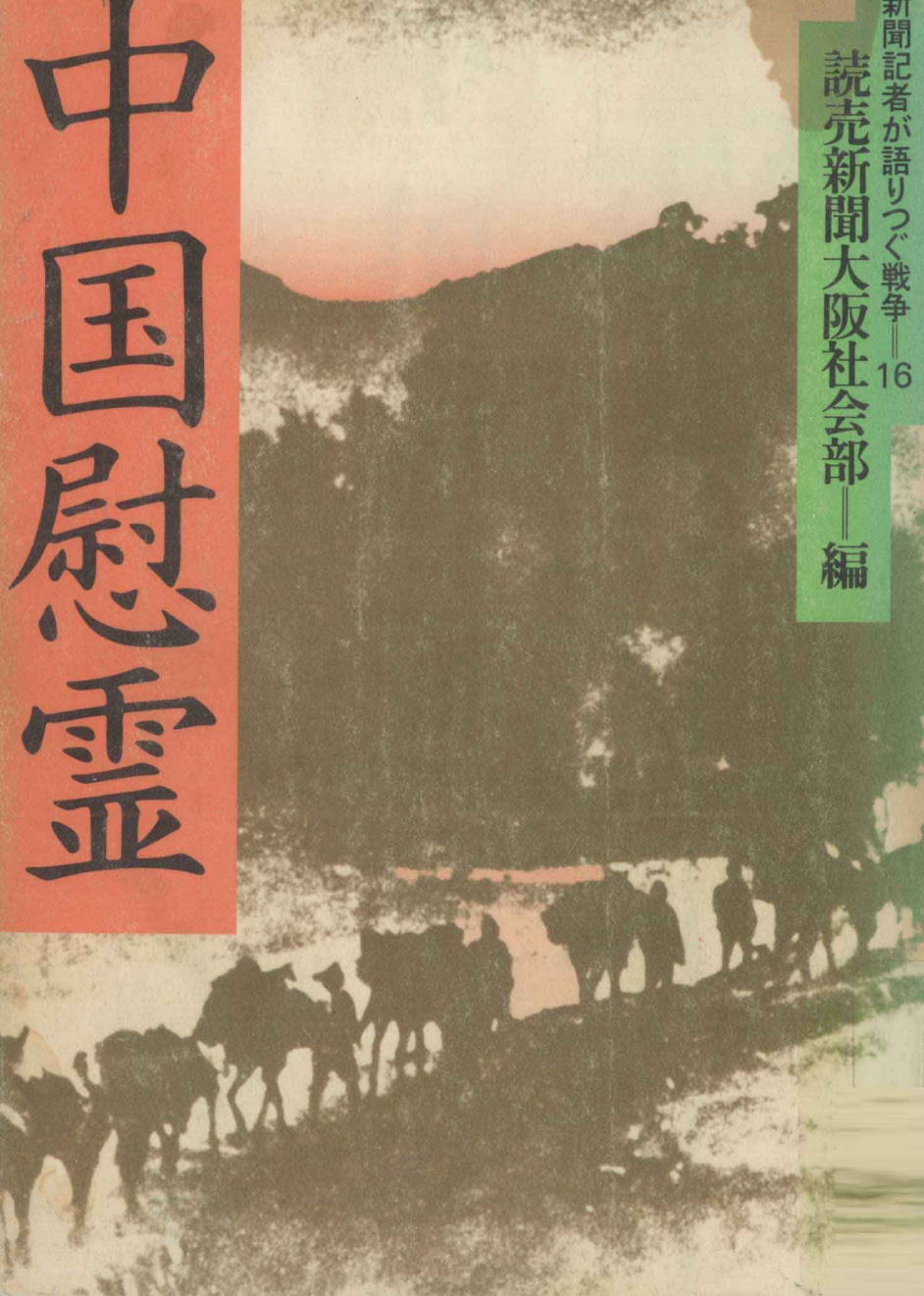


新聞記者が語りつくす戦争

16

読売新聞大阪社会部 編

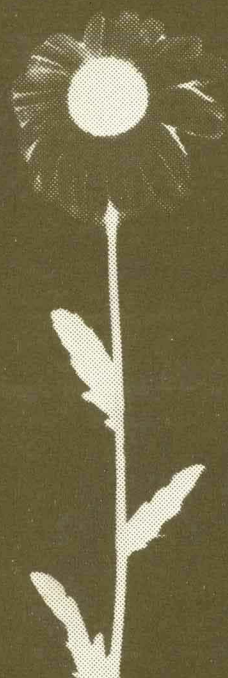
中国慰霊



新聞記者が語りつくす戦争 16

中国慰霊

新聞大阪社会部 編



読売新聞社

新聞記者が語りつぐ戦争=16

中国慰霊

定価 950 円

昭和58年 2 月 23 日 第 1 刷

編 者 読 売 新 聞
大阪本社社会部

編集人 守 屋 健 郎

発行人 加 藤 祥 二

発行所 読 売 新 聞 社

〒100 東京都千代田区大手町 1-7-1

〒530 大 阪 市 北 区 野 崎 町 8-10

〒802 北九州市小倉北区明和町 1-11

印刷所・明和印刷 製本所・豊文社

☆落丁・乱丁本はお取り替えいたします

© 1983, YOMIURI SHIMBUN-SHA 0320-308060-8715

中国慰靈
目次

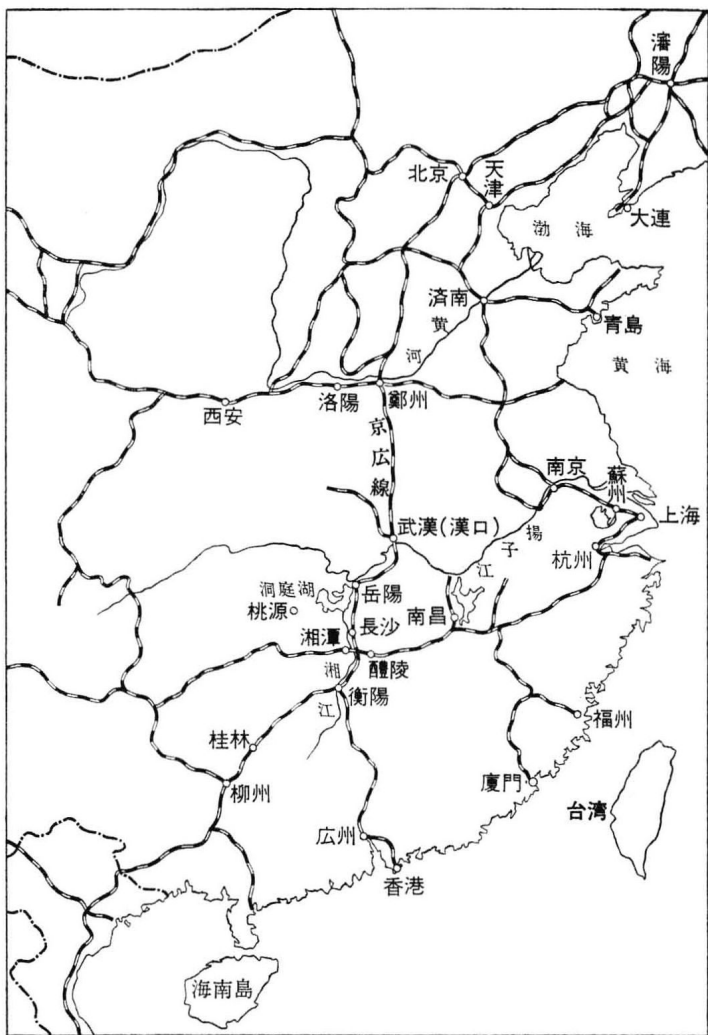
湖南の戦場	5
雨の湘江	16
長衡公路	35
地獄の衡陽	54
あなた：	68
三三高地	80
アカシアの前線	104
泥と兵隊	127
衛生兵の手記	146
コレラ	158
軍医の告白	168
重い旅	186
由利子よ：	208
(あとがき)	227

カット・挿画 装丁
野尻 代田
弘 獎

中国慰霊

新聞記者が語りつぐ戦争

16



湖南の戦場



「特快一六号」は、車輪の音を単調に響かせていた。中国大陸南部最大の都市、広州から北へ約二千キロ、首都・北京と結ぶ京広鐵路、その長い道のりを二昼夜がかりで走る大陸縦断列車のくすんだ緑色の車体が広州駅のホームをすべり出たのは、昭和五十七年三月十二日の午後九時前だった。

二段式ベッドが並び、窓ぎわに通路というつくりは日本の寝台列車とほぼ同じだが、コンパートメント方式で、四人用の個室に仕切られている。発車して三時間もしないうちに消灯となり、三疊ほどの個室の天井や枕元の灯りは自動的に消え、足元の豆電球の光だけになった。通路も天井の電灯が、ポツン、ポツンと弱々しい光を落としているばかりである。

「長沙、衡陽の旅」の日本人一行十六人は、その暗い部屋に四人、五人と集まっては、ベッドに腰をかけて、ぼそぼそと小声で話し込んだり、入れ替わり立ち替わり、通路に出ては、窓ガラスに顔をくっつけて、長い間、外を見入っている。時折、月明かりが雲間からまれ、山並みらしい黒い影がぼんやりと浮かぶほかは、何も見えない。

一行のいる車両は個室が八つ。四つを日本人、残りは始発駅の広州からいっしょに乗り込んだ中

国人が占めた。赤い襟章の付いた草色の制服、赤い星の入った帽子で、一目で解放軍兵士とわかるその中国人たちは、とくに部屋こまのドアを閉め切っている。

「さあ、ぼちぼち湖南省に入る頃ころですよ」。旅の団長を務める多賀正文さん（五六）（大阪市平野区加美東六の四の二四）が、ポンと両手を打って言った。部屋で話し込んでいた人たちは、ハッとしたように立ち上がって、通路の窓ぎわに走り寄った。

湖南省。中国最大の湖、洞庭湖の南に広がる省である。昭和十九年、日本陸軍はこの地で、三十万もの将兵をつぎ込む陸軍史上最大の作戦を展開した。湘桂作戦と呼ばれたその戦闘は、戦死、戦病死者十万余を出した。旅のメンバー十六人のうち十一人が湘桂作戦をくぐり抜けたかつての歩兵、輜重兵しじゅうへい、通信兵、衛生兵で、二人が遺族である。この十三人に読売新聞大阪本社社会部八戦争取材班の岸本弘一と塩雅晴、旅行社の添乗員が同行し、最激戦地であった長沙、衡陽を訪ねるのだ。

「京広鉄路はね、昔は粵漢鉄道えつかんと言ってね、広州と漢口を結んでいたんですよ。この鉄道を奪うために、線路沿いを行軍し、戦った。たくさんの方友が死んでいったですよ」

多賀さんは、窓の外の闇を見つめながら、だれに言うともなく、言った。みんな、うん、うんとうなずきながら、同じように目をこらしている。そうだ、あの粵漢鉄道を三十八年後のいま、自分たちはこうして列車に揺られている。あの道は……、激戦の跡は……。闇をすかしてでも見たい。そんな思いを、それぞれの目が語っていた。

「胸がつぶれそうやなあ……」

多賀さんが、またつぶやいた。「特快一六号」はカタン、コトンと単調な車輪の音を響かせ、走り続けている。

塩は闇を見つめた。闇の向こうに、咲き乱れる真つ赤なカンナの花を思い浮かべた。

中国・湖南省をひた走る「特快一六号」。その窓の闇に思う、咲き乱れる深紅のカンナ……。それは、前年の第五回八戦争V展の一月ほど前のことだった。八戦争V部屋を不意打ちで訪れた初老の男が、居合わせた塩に、こう切り出したのだ。

「展覧会の会場の隅っこでいいんです。置かしてほしいんです。カンナの花なんです」

その人が、多賀正文さんだった。白髪まじりの五分刈り、大きい体にいかつい顔。口調も、ぶっきらぼうだったが、表情には思いつめたものがあつた。しかし、いきなり、カンナの花と言われても……。

「いや、ただのカンナではないんです。中国の湖南省から持ち帰ったものなんです。そこでね、日本軍は湘桂作戦いう、ものすごい戦争をやったんです。咲き乱れるカンナのそばで、ばたばたと死んでいったんです。十万人ですよ、十万人」

「十万人？」塩は思わず問い返した。彼はその春、四年間にわたる司法記者生活を終えて八戦争V取材班に加わったばかりだったが、父親は徐州や蘇州など中国大陸の戦場にいたことがあり、子供の頃からうんざりするほど話を聞かされてきた。しかし、十万人もが戦死した戦いがあつたことは初耳だった。

「ええ、十万人。弾薬も食糧も薬もない状態で闘ったんですよ。兵隊は弾が当たっても治療できない。弾が当たらなくても、栄養失調で倒れる。ぼくはね、檜六十八師団の輜重兵やったんですがね、最前線に行くと、死体が山のように折り重なってるんです。炎天下でつかかい、死体はすぐに腐って、すごい臭い^{にお}がしてるし、傷口にはウジがわいて、真っ白になっている。ぼくら、死体をつ一つ壕^{ぼく}に埋めました。その一人ひとりねえ、二十歳そこそですよ。あでもない顔してるんです。ついこの間まで、心齋橋あたりを楽しそうに歩いてたんじゃないか、こんな若者がなんでこんなことにならないかんのや、と思うと、悲しゅうて悲しゅうて……。もし、自分が生きて帰ったら、必ずここへまた来るぞ、線香の一本もたむけてやるぞ、そう思ったんです」

多賀さんは一気に話すと少し落ち着いたのか、八戦争V展に置かせてほしいというカンナの花のことを説明した。激戦の湘桂作戦のなかでも、とりわけひどかったのが長沙、衡陽。前の年に、三十六年ぶりに再訪の念願を果たした多賀さんは、つき動かされるように、その春も、二度目の旅をし、戦場跡に咲くカンナを数株、持ち帰ったのだという。

「あの頃、食糧の補給がないもんやから、畑にあったイモも、まだ青い稲穂の実さえ、日本軍は食べ尽くしてしまつて何もない。そんなとき、赤、黄色、オレンジと、亜熱帯の強い日差しに照り映えていたカンナの花が目には焼きついてねえ。カンナを見ると、戦友が私に、また来てくれよと呼んでいるように思えてならないんです」

そう言つて多賀さんは、帰つて行つた。塩は、すぐ中国の地図を開いた。湖南省長沙、衡陽——。水の美しさを讃^{たた}えられる湖、洞庭湖にそそぐ湘江のほとりに長沙はあった。さらに南へ約二百キ

口、そこが衡陽だった。きっと美しいところだろう、そこに咲くカンナの花を見ながら逝った十万の将兵。「カンナの花を見ていると戦友がまた来てくれよと呼ぶんです」という多賀さんの言葉が、耳をうった。

カンナは、第五回△戦争▽展に出陳され、岸本と塩が担当する「中国コーナー」で真っ赤な花を咲かせ続けた。

花びらにそっと手を触れる人、黙禱^{もくとう}し、酒を置く人、千羽鶴を手向ける人……。コーナーに人垣は絶えることがなかった。「やさしい兄でした。この花を見ながら死んだのでしょうか」「そうだ、このカンナだ。戦友は花に顔を埋めるようにして……」

多賀さんも、毎日のように会場に姿を見せた。いとおしむように鉢に水をやり、岸本、塩の姿を見かけると繰り返した。

「連載でも、是非、中国をやって下さい。大陸全体では、七十万人も死んでいるんですよ」

多賀さんの願いは、二人の思いでもあった。そして、展覧会の二か月後。△戦争▽部屋で、連載の進め方について話し合ったその日、黒田清社会部長は「来年は、中国やなあ」と期せずして言って、スタッフを見渡した。

「君らも覚えてるやろ、あのカンナに見入る人、夜香花を受け取った人の顔を……」

夜香花はビルマの激戦地から持ち帰られ、「中国」の斜め向かいのコーナーに展示されていたもので、展覧会の最終日、黒田は、その花の鉢植えをゆかりの人に一つ一つ手渡した。そして、会場

内の記者室に戻ってくるなり、原稿用紙に向かってペンを走らせ、翌日の朝刊社会面の「窓」欄にこう書いた。「ビルマで肉親を亡くされた方たちに夜香花の苗をお渡ししました。『どうかこの花の香りで故人を偲しのばれ……』。そう言いながらまた涙があふれてきました。この人たちの父を兄を弟を奪ったのはだれだ。幸せを奪ったのはだれだ……」

△戦争V部屋で、黒田は続けた。

「一輪の花、ひと握りの砂にしか肉親をしのぶことのできない人々のことを考えるとたまらない。まして、中国は戦後長いこと、行きとくても行けんところやった。ここ一、二年、やっと戦友会なども訪中できるようになったが、全体からみれば、まだほんの一部だろう。ものすごい数の遺族や戦友が、中国へ行きたい、行きたいと思い続けているに違いない。われわれはそんな人々の心といっしょになってあげたいと思う」

うなずく岸本と塩は、多賀さんの言葉を思い返していた。「この春の旅には、ご主人を亡くされた人が参加しましたが、その婦人は、列車が長沙の駅に着いてホームに降りたとたん、うずくまっしてしもうて、ブルブル体を震わせてね、『どうとう来た、どうとう来た』と泣きじやくるんですよ」「よっしゃ」と言って、黒田は、ボールペンでメモ用紙をポンとたたいた。

「まず、大陸の孤児や。これは大谷と真鍋。それから、カンナが多賀さん、もう一度、中国へ行きたいと言うてはったらしいやないか。岸さんと塩君、いっしょに行かせてもらったらどうや」

だが、話の終わりに付け加えた言葉は十九年生まれの岸本、二十三年生まれの塩には、とりわけ重かった。

「ただな、中国の戦争はな、空襲の悲劇や沖縄なんかの戦争と違う側面を持っている。いや、兵士一人ひとり、肉親を失った人々にとって、悲惨さは同じなんやが、大陸ではな、こちらもまた、たくさんの中国の人たちを傷つけ、死なせてる。そのところを、忘れるなよ」

長沙、衡陽への慰霊団十六人を乗せた「特快一六号」は、暗闇の京広鉄道を走り続けていた。湖南省に入って、もう数時間が過ぎていた。三月十三日未明。慰霊団の人たちは、相変わらず薄暗い個室で話し込んだり、通路の窓から外の闇を見ていた。

△戦争▽展後の黒田社会部長のゴーサインを受けて岸本と塩は早速、カンナの多賀さんに話を持ちかけた。多賀さんは電機メーカーの下請けをしているが、「得意先の了解を取って、大車輪で仕事を片付けまっさ」と顔をくしゃくしゃにしたものだった。

「肉親の死んだところがどんなところか、一目見たいと思う心があるのに、どうしたら中国へ行けるかわからん人がいるやろし、しっかりした戦友会がなくて行く機会のない人もいるはずですよ。

ぼくは、そんな人を連れて行ってあげたい。一つの戦友会の旅でなく、そんな旅をしたいんです」

多賀さんの思いを汲み、読売新聞の「戦争たずね人」欄で呼びかけて集まったのが、旅のメンバーで、三月十一日、大阪空港を飛び立ち、香港から中国の国境を越えた。通路にいた塩が個室をのぞくと、多賀さんが、岸本たち五人と話し込んでいた。夫の戦死した衡陽の地を初めて踏む京都府綾部市の荒井幸子さん(五)。一行ただ一人の女性で、「展覧会でカンナを見て、行きとって、行きとって……」と参加された。和歌山の堀内圭一さん(六)、戸田芳郎さん(六)、大阪府泉南郡の若野義

明さん(六三)の三人は、檜第六十八師団一一七大隊の戦友同士である。

「無茶な戦争としか言えんですよ。弾も、食べるものもないんやから」「塩がなかったんは辛かった。汗をなめても、しょっぱいことあらへんかった」

話し手は、もっぱら多賀さんたち四人で、荒井さんは一言一言に「まあ」とか「大変なことを……」と言いながら、うなずいている。どんなことでも聞きたい、教えてほしい、夫がどんな戦いに駆り出されていたのかを知りたい。表情からはそんな思いが伝わってくる。

戸田さんが、部屋の隅の小机に置かれた湯のみを手にし、冷えた花茶(ジャスミン茶)を一口飲んで続けた。

「敵弾を受けた男がね、はいつくばってね『班長殿、突撃します、突撃しますっ』と何回も叫ぶんです。その叫び声がだんだん小さくなって、死んでしまいました。ぼくは、あの声が忘れられん……」

戸田さんは、そう言って脇のバッグからノートを取り出した。

「そんなふうに死んでいった戦友が、ほら思い出すだけで、こんなにいるんです」

一ページにぎっしり、鉛筆書きされた人の名前が並んでいる。堀内さんが、じいっと、そのノートをのぞき込んで、独り言のように言った。

「夢の中に、十人も二十人も戦友が出て来るんやねえ……。死んだ戦友を忘れたらあかん。いや、絶対忘れられん」

みんな黙りこくった。荒井さんはひざに目を落としている。岸本と塩は、自分たちの部屋に戻って、ベッドに横になった。開け放したドアの向こうに、兵庫県姫路市の居相行夫さん(六三)の姿があ



った。窓に向かって瘦身^{すしん}を折り曲げて目をこらし、しきりに腕時計を気にしている。

塩が岸本に話しかけた。

「あの居相さんは六十二歳でしょ。他のメンバーも、みんな六十歳前後。そんな人たちが、いまでも戦友のことを思つて、心を昂^{たか}ぶらせている。そう思うと、たまらんですねえ……」

岸本は返事をせず、居相さんを見ていた。実は岸本は居相さんと旧知である。三年前に、八戦争Vの戦没野球人シリーズの中で書いた旧制明石中学の楠本保投手と同じ中隊、正確には檜第六十八師団独立歩兵六十二大隊第一中隊の元分隊長。銃弾にたおれた楠本投手の最期をみとつたと、手紙をいただき、お会いしたことがあったのだ。その縁で、この慰霊団の募集をした時、居相さんから、岸本に手紙が届いた。

「私は中国大陸、とりわけ衡陽という地名を聞

くと血が騒ぎます。衡陽ほど悲惨な戦闘は無かったのではないでしようか。昨秋、この衡陽も外人に開放されたとき、この地を訪ねました。一日だけのあわただしさでしたが、何とか戦跡らしいところを見つけ、内地から持参した酒と水をまいて「もう一度、来るぞ」と亡き戦友の^{おもかげ}を思い浮かべ引き返しました。慰霊といわゆる「しのび慰霊祭」。夜が更けてから、ホテルの一室で、ひそかに般若心経を読み上げるのが精一杯でした。……

もう一度行きたいという気持ちにじんんでいた。岸本が早速、電話を入れると、居相さんは言った。

「実は、私は肺が右一つしかないんです。肺気腫^{きしゅ}というやっかいな病気です。風邪をこじらせると死ぬぞ、と医者に言われている体です。でもね、私は行きます。たとえ、死ぬことがあっても、もう一度、戦友の供養をしたい。それが私に残された仕事です」

「衡陽だっ」。居相さんの叫ぶような声に、岸本はハッと身を起こした。時計を見ると午前五時半。ベッドで二時間ほど、眠り込んでしまったらしい。塩も同じだった。二人が飛び出すと居相さんは窓わくにしがみついていた。あれからずっと、通路に立っていたに違いない。他のメンバーもみな、窓ぎわに集まっている。外はまだ暗い。列車のスピードがしだいに落ち、ガタンと停まった。衡陽駅だった。一行はここをいったん通過して長沙へ行き、二日後に戻ってくる計画だ。ポツンとした灯りに浮かぶプラットホームに、中国人客が何人か降り立つと、列車は動き出した。間もなく、車輪の音が激しくなった。鉄橋だ。下に鉛色の鈍い光を放つ水面が見えた。多賀さんが塩の肩をポンとたたいた。